我が署と地域社会とのかかわり
（「二代目大ヒノキ」を活かしたＰＲ活動）

付知営林署　業務課　技術専門官　早川　幸治

１，はじめに

これまで国有林はその時々の時代の要請に応え，国土保全その他森林の持つ公益的機能を確保しながら，毎年大量の木材を供給して来ました。

その後世界の経済情勢の変化に伴い，年々大量の外材が輸入されるようになり，国有林を初め，森林に対する国民のニーズも木材の供給から，水源かん養或いはレクレーションの森等，公益的機能を重視する方向に変化してきました。

これら多様化した国民のニーズに応えるため，国有林の所在する地域や，川下の人達に直接国有林に来て貰い，国有林の果たす役割等を理解して貰うことが重要になりました。

付知営林署では今までも，「渡合野営場」「日和立のビーグリーン」「乙女渓谷のキャンプ場」等一般に開放し，多くの人達に国有林に入り楽しんで貰っていましたが，更に地域や川下の人達に国有林に来て貰い，国有林の現状の理解を得るにはどうしたらよいか，全職員から意見を聞き，それをもとに検討委員会を開くことにしました。

「旧神宮備林」は従来ゲートを設置し，一般の人達の入林を規制していましたが，検討委員会のなかで，国民のニーズに応えて行くために，「旧神宮備林」と「大ヒノキ」を職員が案内し，「川下の人達に知って貰うことが必要でないか」と言う意見が出され準備を進めることにしました。

２，二代目大ヒノキ発見までの経緯

初代大ヒノキは，「旧神宮備林」の守り神として昔から「そま人」に崇められていましたが，昭和９年日本を襲った室戸台風により地上１２ｍの高さで折れ，昭和２９年に学術参考用として伐倒されました。

この初代大ヒノキは現在年輪版として，名古屋市の科学館・需要開発センター・加子母村役場・付知町の花街道センター等に展示されています。

その後付知営林署では，初代大ヒノキに替わる二大目を名乗るにふさわしい銘木を，諸先輩や地元古老の話をたよりに，急峻な山の中を捜し回った結果，昭和５６年ようやく二代目にふさわしい大木を見つけることが出来ました。

（表－１）のとおり，初代大ヒノキに比べるとやや小さいものの，周囲の木々を圧倒する見事なものです。

しかし，この大ヒノキも二代目としての披露は長い間行われず，その存在を知っているのも一部の職員のみでした。

（表－１）初代大ヒノキと二代目大ヒノキの比較

区　　分	初代大ヒノキ	二代目大ヒノキ
樹　　齢	９５０年	１，０００年
根元直径	２５５ｃｍ	１８６ｃｍ
胸高直径	２１３ｃｍ	１５４ｃｍ
樹　　高	３６ｍ	２６ｍ
材　　積	４３㎥	１７㎥

3．二代目大ヒノキへの歩道整備

そこで検討委員会では，この大ヒノキを二代目と名付け，地域の人達に広く知って貰うため，大ヒノキへの歩道整備から始めることにし，昨年の5月から署内の職員の業務の繁閑を見ながら歩道を整備することにしました。

現地を知っている職員の案内で現地踏査をしたところ，大ヒノキまでの道は昔の森林軌道跡・獣道・或いは歩道も何も無い笹生地とかなり手を加えないと使用出来ないものでした。

森林軌道跡を歩道として利用する箇所は，灌木が生え，落石もかなりあったので，灌木の切り倒しや落石等を取り除き，それを利用しながら整地して行きました。

獣道や笹生地では，成る可く勾配の無い歩道を作るため，事前に山割テープで歩道予定線に印を付け，これで良いかどうか検討しながら進めて行きました。

歩道整備には，掘り取った土が流れないようにするための当て木・やむお得ず急勾配になる箇所は階段を作るための横木等，材料の調達も歩道予定線近くでは適当な材料が見つからず，離れた箇所から全て人力で運ばなければ成りませんでした。

また，歩道近くの広葉樹，特にカエデ類等は秋に大ヒノキを訪れた人々が林内を歩きながら紅葉が楽しめるように極力残すことにしました。

4．立て看板の作設

歩道が完成すると，今度は「看板を作って立てたらどうか」と言う意見が持ち上がり，歩道の入口・昔三緒切りした伐根・森林軌道跡の石積み・大ヒノキ横の4ヵ所に絵心のある職員の手で文字と絵を書き込んでそれぞれ看板を立てました。

5．報道機関への呼び掛け

次に検討委員会では大ヒノキを一般の人達に知って貰う為，昨年9月30日東濃地域の報道各社へ呼び掛け，現地へ案内し新聞報道して貰うことにしました。

東濃各社の取材を受けているところ

6．大ヒノキ・斧入れ式会場の案内

こうして大ヒノキが報道各社から新聞報道され，更に昨年１０月３０日行われた「斧入れ式」の模様が新聞で報道されると，「大ヒノキが見たい」「斧入れ式が行われた会場へ案内して欲しい」との問い合わせが付知営林署に殺到しました。

そこで付知営林署では，原則として一般の人達の案内は毎週水曜日の午後行うことにしました。

昨年の５月歩道整備を初めて以来，１１月までに大ヒノキを見学された人達は岐阜県内はもとより，県外さらには海外の研修生を含め，約８００人になりました。

その中には２・３人のグループから９０人の団体，加子母村の高校生が作る地域の研究グループ，或いは森の交流大使に応募し加子母村で働いている女性も見学に見えました。

森の交流大使の女性達はその任期中，加子母村の各種イベントに参加し多くの人達との触れ合いがあり，この人たちに国有林に来て貰い国有林を身近なものとして受け取って貰ったことは，国有林のＰＲに大変役立ったと思います。

また，団体の中には７０才を越えたお年寄りも見えましたが，「久しぶりに山の中を歩き，自然に触れ満足しました」と喜んで帰られたお年寄りも数多く見えました。

加子母村の森の交流大使が大ヒノキを見学しているところ

7．まとめ

多くの人達に国有林に入って貰い，大ヒノキへの道を案内しながら，森と水の大切さ，自然を守る地道な仕事の大切さ，森林及び国有林のおかれている現状を，ダイレクトに一般の人達に伝える事ができました。

今後付知営林署では，大ヒノキ付近の周遊出来る歩道整備や，ヒノキとサワラの合体木と，昨年１０月３０日行われた「斧入れ式」会場を結ぶ歩道を整備し，大ヒノキから合体木，斧入れ式会場へと約２時間程度の周遊コースを作り，昨年より多くの人達に国有林へ足を運んで頂くなかで，公益的機能を始めとする国有林の重要な役割や現状を今まで以上に積極的にアピールしていきたいと考えています。